

BOOKS ON SALE

# 漱石全集物語

矢口進也 著

青英舎

# 漱石全集物語

1985

青英舎版

著者略歴

矢口進也（やぐちしんや）

1929年大連市に生まれる。図書新聞社、紀伊  
国屋書店、竹内書店、美術出版社勤務を経て  
現在フリー。出版史・読書論などを研究。

著書『文庫そのすべて』（1979、図書新聞）、  
『文庫本繁昌記』（1984、日本古書通信社）

漱石全集物語

1985年9月25日第1刷

著 者 矢口進也

装 幀 松山猛

発行者 堀健二郎

定 価 1600 円

発行所 株式会社青英舎

東京都千代田区神田錦町 2-2 電話 03 (291) 6470 (代)

印刷所 株式会社東京美術

製本所 関川製本株式会社

©Shinya Yaguchi 1985

printed in Japan

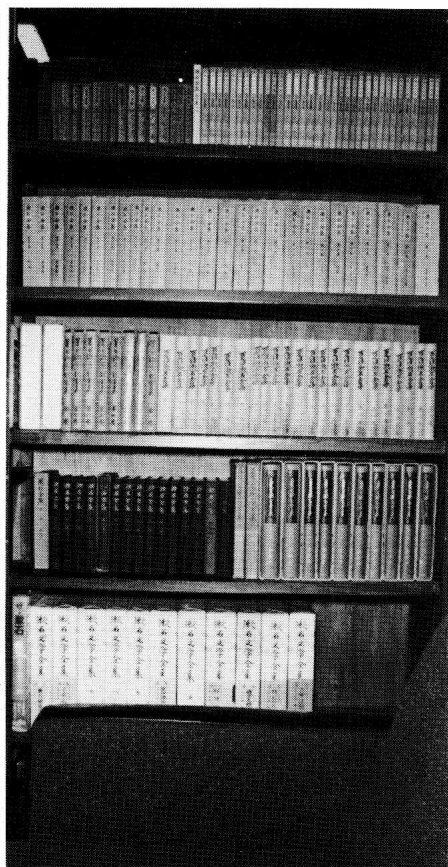
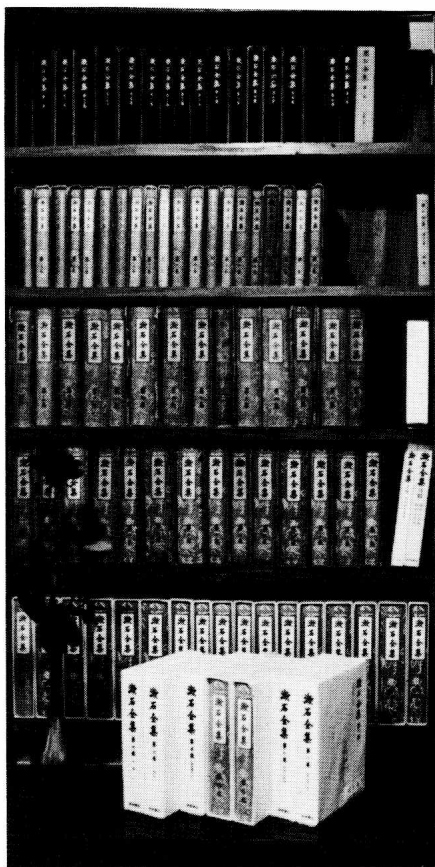
ISBN 4-88233-012-1 C 0095 ¥ 1600 E

漱石全集物語☆目

次

|     |                           |     |
|-----|---------------------------|-----|
| 第一章 | 最初の漱石全集——大正六年版と八年版……………   | 6   |
| 第二章 | 第三回全集の経過——大正十三年版……………     | 26  |
| 第三章 | 普及版の刊行——昭和三年版……………        | 36  |
| 第四章 | 二〇回忌の決定版——昭和十年版……………      | 49  |
| 第五章 | 桜菊書院の登場——昭和二十一年—二十五年…………… | 87  |
| 第六章 | 創芸社版の全集——昭和二十八年—三十年……………  | 130 |
| 第七章 | 岩波の新書版全集——昭和三十一年……………     | 147 |
| 第八章 | 新表記による角川版——昭和三十五年……………    | 158 |

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| 第九章 漱石死後五〇年——昭和四十年 .....      | 166 |
| 第一〇章 集英社版全集と荒正人——昭和四十五年 ..... | 185 |
| 第十一章 重版タイプの全集——昭和四十六年以降 ..... | 205 |
| 補遺——新千円札発行前後 .....            | 220 |
| あとがき .....                    | 225 |
| 漱石全集年表 .....                  | 228 |
| 参考文献 .....                    | 231 |
| 索引 .....                      | 237 |



### 書棚の漱石全集

左側・上から岩波書店・決定版、同普及版、大正8年版、大正13年版、昭和40年版、手前に並べたものは刊行中の特装版

右側・上から岩波書店・新書版と文庫版、2段目同昭和22年版、3段目左から春陽堂ウーブル・コンプレート版・同小説全集と桜菊書院版、4段目左から角川書店版（昭和35）と創芸社版、5段目集英社版と左端「ザ・漱石」

漱石全集物語



## 第一章 最初の漱石全集——大正六年版と八年版

### 漱石の死と「九日会」

夏目漱石は、一九一六年（大正五年）十二月九日、持病の胃潰瘍が原因で永眠した。

伝記とか研究ならば当然その人の誕生あたりから書き起こされるもので、いきなり死去の日が出てくるのでは話が逆だと思われるだろう。なぜ漱石の死からはじまるのかといえば、私の書くうとしているのは漱石その人の伝記ではなく、漱石全集の伝記だからである。全集とは元来死後に刊行されるもので（現存作家の全集が今日ではさかんだが、もちろんこれは完全な全集ではありえない）、したがってこの物語は、ふつうの伝記記述の終ったところからはじまるのである。

大正五年十二月九日。漱石の死んだ日付はこの物語で重要な役割を演じるので、読者の皆さんにはとくに記憶にとどめておいてもらいたい。

十二月十二日、葬儀。十三日、骨上げ。十五日、初七日法要。二十八日、埋葬式……というふ

うに、漱石死後の漱石山房では、多くの門人、知人が出入りし、あわただしく事が運んでいた。漱石全集刊行の話が、いつ、誰から持ち出されたか、いまは定かでない。しかし、遺族とそれとをとりまく弟子たちのあいだでは、ごく早い時期に話されていたものらしい。

江口渙『わが文学半生記』には、漱石死後一か月目の大正六年一月九日、漱石山房に関係者一同が集い、その席で漱石全集を岩波書店から出すこと、編集陣の顔ぶれ、装幀は漱石自装の『ころ』の意匠を用いること、背文字や題扉を狩野亨吉に依頼することなどがきまったと書かれている。漱石の命日にあたる九日には、以後漱石山房でたびたび会が開かれ、「九日会」の名でよばれるのだが、一月九日はその記念すべき第一回の会だった。荒正人『漱石研究年表』によると、当夜の出席者として大塚保治、安倍能成、野上豊一郎、内田百閒、津田青楓、久米正雄、松岡譲、森田草平、和辻哲郎、小宮豊隆、岩波茂雄、阿部次郎、岡田（林原）耕三、真鍋嘉一郎ら二六人の名があげられている。江口渙は、ほかに寺田寅彦、鈴木三重吉も出ていたと書いているが、二人が出席したかどうかははっきりしていない。

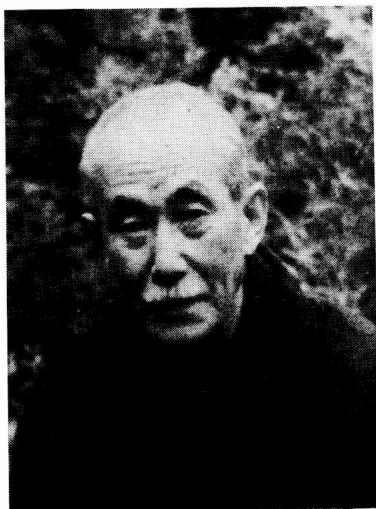
全集刊行の重要決定が、装幀の細目まですべてこの日にきまったというのは、どうも手廻しのよすぎる感じがするし、それから半年以上もあとの大正六年七月二十五日付寺田寅彦日記に「……又出版所の問題も未解決らしき説あり」という記述があり、必ずしもすべてが一月にきまったのではないようにも受けとれる。岩波書店が発行元となるまでの背景はもう少し追ってみる必要がある。

## 岩波の処女出版「こゝろ」

漱石の著作を出していたのは、大倉書店（吾輩は猫である）全三巻ほか三冊、ただし一部は服部書店との共同出版）、春陽堂（虞美人草）ほか八冊）、岩波書店（「こゝろ」ほか二冊）の三社が主で、それぞれ初期、中期、晩年の著作を刊行している。大倉書店と春陽堂がともに明治初期の創立で当時有力な出版社だったのにくらべて、岩波書店は、教師をやめた岩波茂雄が大正三年八月に神保町で開業した古本屋にすぎなかった。かねて漱石を尊敬していた岩波は、友人の安倍能成を通じて店の看板を揮毫してもらったが、以後もしばしば漱石山房に出入りして漱石に親炙し、思いがけなく「こゝろ」を出版することができた。岩波書店の記念すべき処女出版である。

大倉書店、春陽堂以外の版元とはあまり関係をもたなかった漱石も、文名の高まりとともに、いくつもの出版社から本を出したいという話もちこまれるようになった。漱石はその煩わしさを避けたい気持と、いっそ自費出版で自分の思いどおりの本を出してみようと考えて、ちょうど出版をはじめたいといってきた岩波から「こゝろ」を出すことにしたのである。岩波にとってはまたとない幸運だった。

岩波茂雄はたいへんな意気込みで「こゝろ」の出版にうちこみ、最高の材料を使うなど念を入れた。その結果、出来ばえはたいへん漱石をよろこばせた。処女出版とはいえ、資金力のない岩波のために費用の一切は漱石が負担し、売上金は両者で配分する契約だった。これが縁で、以後



小宮豊隆



岩波茂雄



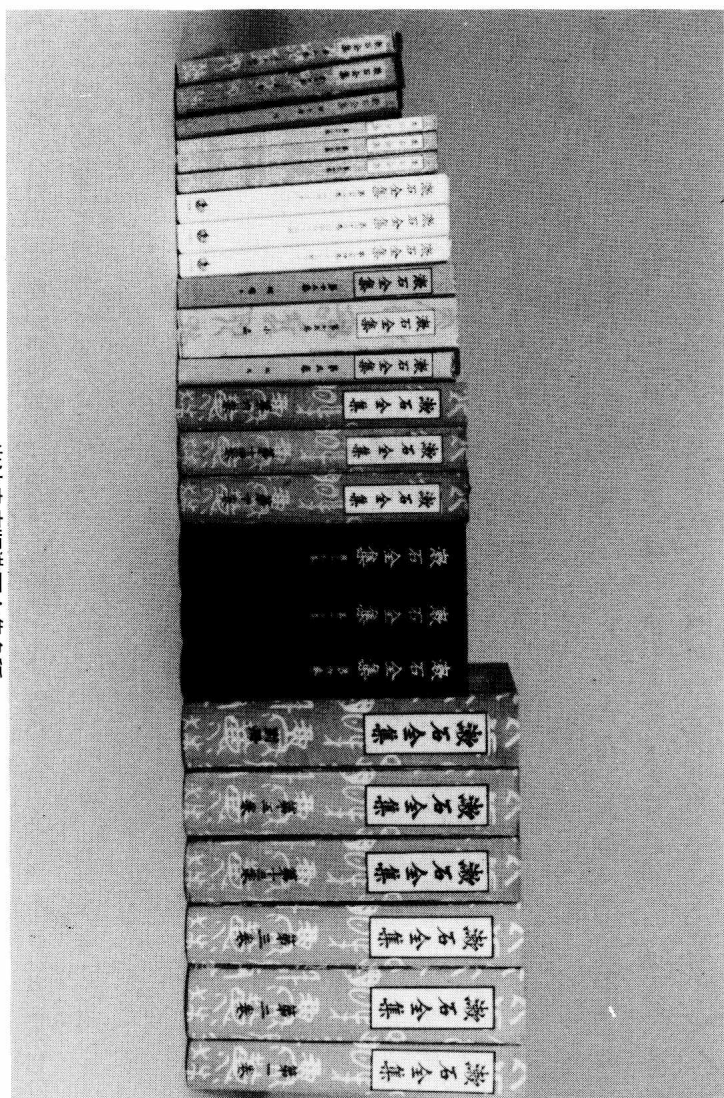
森田草平

の漱石の新著、「硝子戸の中」「道草」がひきつづき岩波から出版されることになる。無名の一古書店が流行作家の新著を出したのだから、出版を手がけるに際してこれほど力強い援助はない。岩波が漱石に恩義を感じたとしても当然だろう。出版だけでなく事業の上でも、岩波は漱石からたびたび資金の融通を受け、両者の間柄は出版社と著者というより師弟関係に近かった。

漱石全集発行の話がもちあがると、岩波茂雄はその熱心な推進者となった。というより、漱石の全集は自分が出さねばならぬ、また自分が出すのが夏目家にとって最もよいことだと主張した。漱石の弟子たちの中で、すでに作家として世に出ていた鈴木三重吉や森田草平は、漱石の本を最も多く出版し、文芸出版社として著名な春陽堂の肩をもったが、岩波の熱意は遺族、とくに鏡子未亡人を動かしたものと思われる。第一回の九日会の席で全集を岩波書店から出すことが話されたのは、こうした岩波の精力的な説得工作が実を結んだからだろう。

しかし、やはり全集を出したいと希望していた春陽堂や大倉書店の意向を全く無視するわけにはいかなかった。誰の発案か不明だが、漱石全集刊行会というものを岩波書店内につくり、実質的な仕事は岩波書店がすすめるが、発売元として岩波、大倉、春陽堂の三社が名をつらねるという形におちついた。予約はこの三社が共同で募集し、扱い高によるマージンを受けとるのである。先輩の二社の顔を立て、世間的にも信用を高めるなかなかうまい方法だった。おそらく、ここにいるまでの曲折が、寺田寅彦日記の記述となったのだと思われる。

岩波書店からは大正六年一月下旬に漱石最後の著作となった未完の「明暗」が、六月には「こゝ



岩波書店版漱石全集各種

(左から文庫版、新書版、昭和2年版、昭和3年版、昭和10年版、大正13年版、昭和40年版)

ろ」「道草」の縮刷版が出た。全集の編集実務は森田草平や小宮豊隆が中心になってすすめられ、森田の意をうけた内田百閒が岩波書店に通つて印刷所に渡す原稿をつくつた。小宮の方は未刊の日記や書簡の編集にあたつていたようである。

### 使命感あふれる発刊の辞

この全集にたいする岩波茂雄の意気込みは、漱石全集予約者募集のパンフレットをみるとよくわかる。四六判、表紙を含めて二八頁もあるこの内容見本には「漱石全集発刊に就て」という三頁分の文章がある。「明治の末葉より大正の初頭に互つての漱石先生の創作的活動は實に一世の驚異であつた」にはじまり、「頭脳文章兼具し得たる哲人的文豪」とか、「東洋思想と西洋思想との生きたる融合は独り先生の作品に求め得べく」とか、「先生は實に我国が未だ嘗て有せざりし国民的作家にして又世界的作家である」などと最大級の讃辞をつらねている。漱石にたいする評価につづけて、この全集は量質ともに最上のものをめざすと宣言し、「我等は實に日本人の在る所、必ず此文豪の此全集あつてその精神的食物たり、教訓たり、慰藉たらんことを願つてやまざる者である」と書いた。

このパンフレットの文章は、ほかの予約規定などにいたるまではほとんどすべて岩波茂雄が書いたものようだが、注意されるのは漱石をさす場合「漱石先生」または「先生」で通していることである。刊行者の挨拶文というよりは門下生の使命感がほとばしり出たという破格のものだっ

日本が生める世界的文豪を

永久に記念すべき一大金字塔

# 漱石全集

豫約  
募集

大正六年九月

規定及内容見本

藝術は永く

人生は短し

東京市神田區南神保町 岩波書店内

漱石全集刊行會

電話本局五四二〇番 郵便東京三八一五番

28頁もある最初の内容見本



た。

七十数年後の今日、漱石文学がこんなにも読まれ、全集が何十種も出ようとは岩波茂雄も予想できなかっただろう。しかし、この発刊の辞にこめられた彼の願いはたしかに実現した。そして、その礎をなしたのもこの全集だったことは間違いない事実なのである。

漱石全集の内容が発表されたのは一九一七年（大正六年）九月だが、さきの内容見本をもう少し詳しく見てみよう。まず編集陣容だが、顧問は狩野亨吉・大塚保治・中村是公の三人、編輯は寺田寅彦・松根豊次郎・阿部次郎・鈴木三重吉・野上豊一郎・安倍能成・森田草平・小宮豊隆の八人である。予約規定には、一、予約者にのみ頒布、二、大正六年十二月一日より大正七年十一月一日まで毎月一冊、全一二冊完結、三、体裁は洋装・菊版・ポプリン製・天金・表紙木版の手摺、頁数一冊平均八〇〇頁、四、申込期日大正六年十月三十一日限り、五、申込金三円（最終回配本にあてる）、毎冊三円、以下送料規定などが列記されている。アート紙折込で一冊の実物大写真と全冊の写真が挿入してある。

発刊の辞のあとは、解説つきの各巻内容が一二頁にわたっているが、ここには巻数と表題を示しておく。

第一卷「吾輩は猫である」

第二卷「短篇小説集」

第三卷「虞美人草 坑夫」